特集 新

掘故考新（くっここうしん）
～原始古代から今を考える～

三重大学人文学部・教授
山中　章 Yamanaka, Akira
【URL】http://faculty.human.mie-u.ac.jp/~koukogaku/
（三重大学人文学部考古学研究室公式HP）

故きを掘って、
新しきを考えてみよう!!

あなたはどっち?

今 トイレットペーパー ← 昔 木簡

常識って何だろう?

日本人の得意技!箸使い。ところが遺跡を掘っても箸が出ない!奈良時代になると都で発見される。手食だったのか?!毎朝籠もるトイレ。ドアーを閉め、鍵をかけ完全密閉。ところが奈良の都のど真ん中、役所のトイレに囲いがない!エッお尻丸出し?その上お尻は木で拭いて痛!!洋の東西を問わず昔は世界中トイレはオープン!!これが常識。

当たり前と思っていること、それほど深い歴史があるとは限らないらしい。

考古学者は名探偵コナン??

古い物は壊れ、朽ち果てる。家は柱を立てた穴の跡だけ。どうして屋根の形が判るの?三重大学校内を掘ると液状化現象が確認できる。500年前の大地震だと推察される。地盤が2mも下がり、津波が襲った。鈴鹿関跡※1からは、棒で突き固めた土の高まりが発見された。1300年前の城壁の跡だという。戦争に備えた城壁らしい。

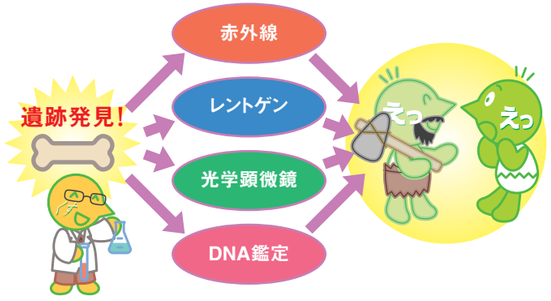
巨大な遺跡であっても、その発掘作業はとても緻密だ。小さなスコップで、時には爪楊枝まで使って発掘調査は行われる。そうして発見された小さな粉々の土器を一つ一つ手作業で復元していく。根気の要るアナログ作業だ。

最近では、遺跡を最新の測量機器で測り、土砂は光学顕微鏡で観察し、花粉や寄生虫卵まで分析する。錆びた鉄にレントゲンを当て、漆に赤外線を当てる。人骨が発見されればDNA鑑定までする。遺跡の種類や時代、土砂の起源、排泄者の病気や食生活、遺体の家系、埋もれた文字を読み解くためだ。わずかに残されたヒントから当時の様子を推理する。そんな考古学者の姿は、さながら名探偵のようである。

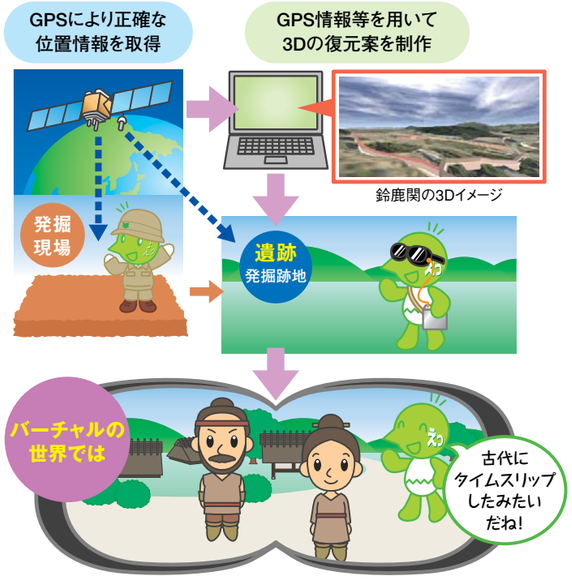
細かな発掘作業が命!

小さな破片から復元された土器

最新技術で、ご先祖様に対面!



未来のバーチャルミュージアム?



カーナビ技術でヴァーチャルリアリティー※2

さて、こうして復元された古代の生活、学者が書いた複雑な論文をひもといたり、跡地に残された立て看板を読んで、頭の中で想像するには限界があるだろう。もう一工夫が必要だ。どうする?

そこで活躍するのがヴァーチャルリアリティー。コンピューターで復元案を制作し、カーナビでも使われるGPSと繋ぐことで、遺跡のその場所で復元された3D画像が、パソコン上に映し出されるようにした。様々な角度から往時の遺跡を眺望することを可能にした。（左図参照）

夏に調査に訪れたレバノンのローマ都市テイールでは、GPSで2000点もの位置を測り、映画『ベン・ハー』にも登場する戦車競技場の設計プランを解明した。バーチャルの世界でトコトコと階段に登って、戦車競技の様子をうかがうこともできるのである。

あなたは、どの時代にタイムスリップしたいですか?

※1：旧東海道の関所。現在、三重県亀山市関町において発掘調査中
※2：仮想現実